

アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館 ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



狩野益信《賢帝図屏風》
江戸時代前期
紙本金地着色
各一六三・八×三六二・〇cm

中国・古代の賢帝を金屏風に描いた作品である。左右隻にはそれぞれ、明君にまつわる故事が吉祥的なモチーフを交えて描かれている。風凰などモチーフの描写は丁寧で、金色の光が画面に華やきを添えている。全体的に典雅で格調高い画風によって描かれているが、樹木や岩の描写には荒い筆致が用いられ、濃彩、濃墨を用いた重々しい表現もみられる点が面白い。作者の狩野益信（一六二五～九四）は、江戸時代前期の巨匠・狩野探幽（一六〇二～七四）の養子となり、後に別家して駿河台狩野家の祖となった画家で、一七世紀後半に活躍した江戸狩野派の主要メンバーの一人。未だ謎の多い益信の画風を知るうえで貴重な大作だ。

（主任学芸員 野田麻美）

No.
126
2017年度 | 夏 |

二、三の初仕事について

館長 木下直之

今春、芳賀徹前館長からバトンを引き継ぎ、六代目館長に就任いたしました。美術館での最初の仕事は職員に対する挨拶、いやそれはまだ仕事ではないだろうと思われるかもしれませんが、そうではなく大切な仕事だと考えたわたしは、家から古い一冊のファイルを持参しました。

背表紙に「高橋由一」と記したそれには、芳賀徹「高橋由一と司馬江漢」〔蘭学資料研究会研究報告〕第一四七号〕という手書きの、おそらくはガリ版刷りだった論文の写しが入っています。一九六三年七月二十日の刊行、つまり今から五十四年前の論文です。

この時、芳賀前館長は三十二歳、わたしは九歳、もちろんリアルタイムで読んだはずはありません。では、いつコピーしたのだろう。

たぶん、高橋由一という画家が気になり始めた一九八〇年代後半だろうと思います。そのころ、わたしは兵庫県立近代美術館の学芸員でした。しかし、論文は読んだものの、芳賀前館長にお会いするのはずっとあとのことです。

本人には会わなくとも書きものつながる、これを学恩というのですね。文字に親しんでおれば、初対面でも既知の人だと感じる。こんなふうに学問はつながる。同様に、美術館もまた人から人へとつないで歴史を重ねるのだ、ということを最初の挨拶で伝えたくて古いファイルを引っ張り出したのでした。

多くの人が美術館と聞いて思い浮かべるものは、建物であり、展示された美術作品であるかもしれません。しかし、それよりもっと重要

なものが、この施設をさまざまな立場から支える人です。

きょうも美術館が開館している、誰もが訪れることができる、という状態を維持するだけでも、館と県の職員、それに友の会やボランティア、警備やレストランの方々の目には見えない努力があるはずで

仕事の間際に、仕事をさぼって(？)、いやいや、それも館長が最初にやるべき仕事だと考えて、本誌『アマリス』バックナンバーに目を通しました。この美術館の歴史をひもとくことができます。

昨年春に迎えた開館三十周年に合わせるように、何人ものOBが寄稿しています。山下善也さん(九州国立博物館)の伝える鈴木敬初代館長の言葉「創業は易く守成は難し」(一一一号)、小針由紀隆さん(静岡文

化芸術大学)のいう「変えさせないために変わっていく」(一一三号)に大いに共感したことは本館ホームページに「館長あいさつ」として掲載しましたのでご覧ください。

五月末には、全国美術館会議に館長として出席し、五年越しに議論を重ねてきたという「美術館の原則と美術館関係者の行動指針」採択に賛成の一票を投じました。これも重要な初仕事でした。

美術館の「原則」とはいったい何だろう。それは美術館が社会にあることの根拠であり、わかりやすい例えば、美術館とは何を可能にする場所なのかをはっきりと示すことです。美術館の内部(すなわち関係者)も外部(利用者)も、それを必要としています。

その第四条「美術館の自由」、行動指針四「自由の尊重と確保」について、もう少しお話ししたいのですが、残念ながら紙幅が尽きました。次の機会としましょう。

2017年NHK大河ドラマ 「おんな城主 直虎」特別展

戦国！井伊直虎から直政へ

平成29年 8月14日(月)～10月12日(木)

今年のNHK大河ドラマ「おんな城主 直虎」は、一年にわたって遠州を舞台に物語が展開します。主人公・井伊直虎の名家である今川家の本拠地として、駿府もたびたび登場し、そこにぎわいが印象的に描かれます。いずれも現在の静岡県のこと。当地の戦国時代に思いを馳せ、ドラマを楽しみしておられる方も多いのではないのでしょうか。

この大河ドラマに関連する特別展として、「戦国！井伊直虎から直政へ」を開催します。戦国後期、動乱の時代の

終結に向かって世の中が大きく動き出すなか、遠江・井伊谷の地を治める井伊氏の当主となった直虎と、その後継で、井伊氏繁栄の道を切り開いた直政の活躍に焦点をあてて、構成するものです。

展覧会の冒頭では、駿河の今川、甲斐の武田、尾張の織田といった周辺の戦国大名の動向を紹介し、当時の井伊谷を取り巻く緊迫した状況をご覧いただきます。続いて、そうした厳しい情勢下、井伊の家と幼い世継ぎを守るために尽力した井伊直虎の足跡を、今日に伝わる数少ない貴重な資料からたどるとともに、井伊氏の菩提寺・龍潭寺の伝来品などから、平安以来の遠江の名門、井伊氏の歴史を掘り起こします。直虎の花押が残る唯一の書状《井伊直虎・関口氏経連署状》(前期展示、後期は複製を展示)や、大河ドラマに登場する直親の笛のモデルとなった《青葉の笛》などからは、当時を生きた人々の息吹が感じられます。龍潭寺に伝わる《世継観音像》には、本展のための調査をきっかけに、「井伊次郎法師」の名が記された由緒書きがあることが、新たに発見されました。こちらもぜひご注目ください。

展覧会後半、主役は井伊直政へと移

ります。直政が仕官した徳川家康は、三河から出て勢力を広げ、天下に影響を及ぼす有力大名へと成長しますが、その活躍の背景には優れた家臣たちの活躍がありました。徳川四天王のひとりに数えられ、「赤備え」を率いて戦場を駆けた井伊直政も、その一翼を担ったひとりです。小牧・長久手の戦いや関ヶ原の戦いなど主要な合戦にまつわる歴史資料、甲冑・刀剣などの武具を通して、家康と家臣団による江戸幕府創設への歩みをたどります。

家康の天下統一事業に大きく貢献した直政は、譜代大名筆頭の家格を誇る彦根藩井伊家の始祖となりました。彦根藩は、幕末の井伊直弼に至るまで五人の大老を出した「大老の家」として、長く幕府を支え続けることになりました。展覧会は、その彦根藩の象徴である彦根城の築城のエピソードをもつて締めくくられます。

滅びかけた遠江の小さな家々が、大きな城を擁する近江の大大名・彦根藩井伊家へと駆け上がる、その苦闘の道のりとして、展覧会全体を読み取っていただくことができます。ぜひ、繁栄へと至る礎は、

直虎から直政へ、次世代へのバトンがどうか受け継がれたことよって築かれたのでした。戦国乱世から平和で安定した世の中へ、歴史の大きなうねりの中で奮闘する人々の姿と、知られざる静岡の戦国史を、ぜひ本物の品々を通して確かめください。

(上席学芸員 石上充代)

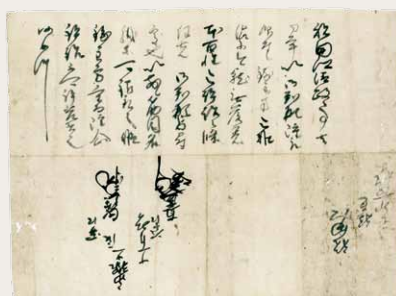
※会期中、一部作品の展示替えがあります。

前期 八月十四日(月)～九月十日(日)

後期 九月十二日(火)～十月十二日(木)



《朱漆塗花色系威鎧延胸腰取三枚胴具足》
岡崎市美術博物館蔵



《井伊直虎・関口氏経連署状》
蜂前神社蔵・浜松市博物館保管

平成二十八年度 新収蔵品・寄贈作品の紹介

静岡県立美術館は、開館以来、「東西の風景画」「静岡ゆかりの美術」などを収集方針とし、コレクションを築いてきました。平成二十八年度にはご寄贈いただいた作品と購入した作品を合わせ、合計四十件を新たに収蔵することができました。ここでは、新たに所蔵品に加わった作品を、ご紹介します。



図1 ジャック・カロ『大受難伝』(十字架運び)



図2 ジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージ
(サン・パオロ門近く、ガイウス・ケステイウスのピラミッド)

西洋画ではジャック・カロ作『大受難伝』(図1《十字架運び》)とジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージ作《サン・パオロ門近く、ガイウ

スケステイウスのピラミッド》(図2)の二件を購入することができました。カロの作品は、磔刑に至るキリストの受難を描いています。カロが得意とした、エシヨップと呼ばれる特殊な道具を用いた銅版画で、硬軟細太の線を自由自在に使い分けながら、七枚組の場面での群像表現をほとんど魔術的に実現しています。

一方、ピラネージの作品は、ローマに今日も残る古代ローマの遺跡を描いた作品です。ピラネージは生涯に何度かこの遺跡を描くのですが、

これはその最初の一枚です。風景画家としてのキャリアを歩み始めた一点でもあり、この頃から彼の莫大な作品群は始まっているのです。
(上席学芸員 南美幸)
日本洋画では、油彩画三件を寄贈いただきました。

北川民次は、代表作《タ



図3 小糸源太郎《東海》

スコの祭》《雑草の如くⅢ》がすでに収蔵されていますが、今回は新出作品《山村初春(高草山風景)》(P.6)をご寄贈いただきました。この作品は、北川民次の数少ない、メキシコ帰国後から戦中期の作品で、静岡県焼津市と藤枝市の境にある高草山をモチーフとした風景画です。北川民次を知るうえで、大変重要な作品です。
小糸源太郎は、洋画壇の重鎮で、当館には代表作《春雪》が所蔵されています。今回は、初期作品で小田原の下曽我梅林をモチーフとした《早春》、晩年に目の病を克服しながら心の眼で描いた《東海》(図3)をご寄贈いただきました。並べてご

覧いただくことで、小糸源太郎の初期から晩年にいたる作風の変化を感じとっていただけたらと思います。

(上席学芸員 泰井良)
日本画では六件の絵画作品をご寄贈いただきました。

はじめにご紹介する作品は、狩野益信《賢帝図屏風》(表紙)です。こちらは静岡県立美術館友の会様より、当館が開館三十周年を迎えたことを記念して、ご寄贈いただきました。古代中国の皇帝にまつわる逸話を格調高く描いた金屏風の大作です。昨年開催した「徳川の平和展」で初公開され、注目を集めました。詳細は表紙解説をご覧ください。

続いて、個人の方よりご寄贈いただいた平井顕斎の作品五件をご紹介します。顕斎は江戸時代後期の遠州榛原郡に生まれました。今回のご寄贈品のうち、《耕織図》(図4)は顕斎の画業を代表する作品のひとつです。右幅に耕作図、左幅に織機図を表す二幅対で、いずれも繊細な筆致と落ち着いた彩色で描かれています。このほかにも、現在確認できる中では最初期の制作になる《李白陶酔図》、師の渡辺崋山の作品を忠実

新収蔵品紹介

木村希八は、戦後日本のリトグラフィ史の入り口に立ち、以後の発展と普及に貢献した人物です。刷り師としての活動は、五十年に渡り、二百名を超える作家の、版画作品の刷り

に写した《鍾馗嫁妹図》、中国画を模写した《鴈門急雨図》、雪舟の富士山図に学んだ《望嶽図》と、バラエティ豊かな顕斎作品がコレクションに加わりました。

(主任学芸員 浦澤倫太郎)

最後に、現代の作品では、彫刻一件、絵画一件、ミクスト・メディア四件、版画二十三件が寄贈により新たにコレクションに加わりました。

ここでは、その一部をご紹介します。



図5 木村希八《田園》

うに見えるかのように見えます。タイトルの「サイクロイド」とは、円がある規則のもとで回転するときを描く軌跡の総称のことです。本作には、外サイクロイド



図4 平井顕斎《耕織図》

を行いました。自らも作家として制作を行っており、版画をはじめ、パステル、ドローイング、カラージュエ、オブジェを個展で発表し、豊かな才能を遺憾なく発揮しました。今回、木村希八の刷りによる草間彌生の版画十二件と、《田園》(図5)を含む木村希八の版画十一件をご寄贈いただきました。

森万里子の《Cycloid IV》(図6)は、複雑で繊細な形が絡み合っ



図6 森万里子《Cycloid IV》

の作る、外部に増殖していくかのよう形状が、取り入れられており、永遠の回転を感じさせる躍動感にあふれています。

ダレン・アーモンドの《In Reflection》(図7)は、十六枚の鏡面パネルの表面に、アクリル絵の具で数字がペイントされている作品です。数字は上下二分割されており、すぐに解読できません。壊れたフリップ

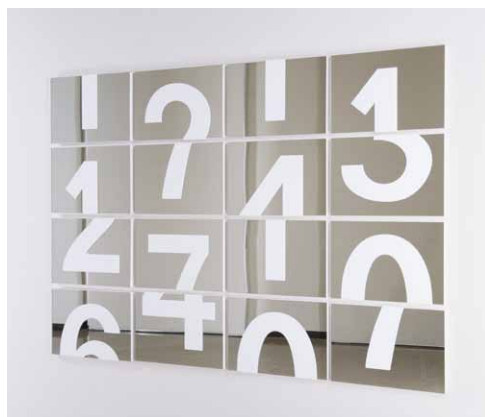


図7 ダレン・アーモンド《In Reflection》

式時計(パタパタ時計)のように、時を告げることがない抽象的なパターンを構成しています。作家は、数字を抽象化することにより、アラビア起源の十進法を強調しつつ、時間を読むための新たなアルゴリズムを生成させ、時間は、不変であり、かつ変化しやすいものであるという、根源的逆説を提起しています。

(上席学芸員 川谷承子)

平成二十八年度ご寄贈者様

(五十音順)

太田正樹様、北川禮太郎様、國分繁子様、静岡県立美術館友の会様、野村紀男様

貴重な作品をご寄贈くださいました皆様には、心より御礼申し上げます。なお、これらの作品は「新収蔵品展」にて、ご覧いただくことが出来ます。

新収蔵品展

七月十四日(金)～八月四日(金)

関連イベント

学芸員によるフロアレクチャー
七月十五日(土) 十五時～

北川民次《山村初春(高草山風景)》について (平成28年度新収蔵作品)

上席学芸員 泰井 良

はじめに

当館では、平成二十八年度、北川民次の戦中期の作品を寄贈により収蔵（北川禮太郎氏による寄贈）することになった。これから紹介する作品は、「山村初春（高草山風景）」（キャンヴァス、油彩、昭和十六年（一九四一）六〇・五×七二・五cm 図1）と題された作品で、民次が静岡の風景を描いたものである。これまで、静岡の風景をモチーフとした作品は、回顧展に出品されたこととはない。民次の画業、作風を検証するうえで、大変貴重な作品と考えられる。

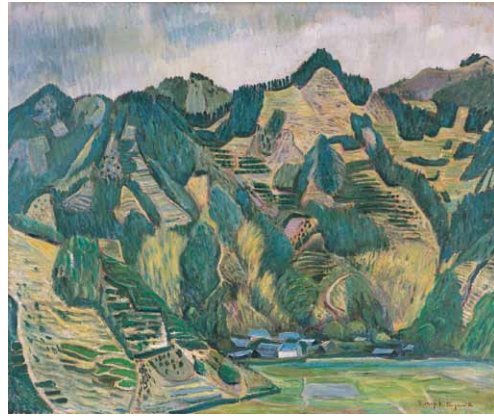


図1

一 北川民次について 明治二七—平成元（二八九四—一九八九）

北川民次は、明治二七年（一八九四）、静岡県榛原郡五和村牛尾（現在の島田市牛尾）の地主の家に生まれた。北川家は、苗字帯刀を許された地元の名主で、現在でも島田市に住む人々は、その名前をよく知っ

ている。その後、静岡商業学校から早稲田大学予科に進んだ後、大正三年、同校を中退し、オレゴン州在住の兄を頼って渡米。大正八年、ニューヨークのアーツ・ステューデンツ・リーグの夜学に学び、ジョン・スローンに師事、学友には国吉康雄がいた。大正十二年、メキシコに渡り、サン・カルロス美術学校を卒業。また、シケイロス、リベラなどと交友、メキシコ・ルネサンスを標榜する彼らの壁画運動に賛同し、メキシコ郊外のトラルパムで児童教育に携わる。昭和六（一九三一）年、タスコに野外美術学校を移して校長となる。昭和十一年帰国、翌年の第二九回二科展に《タスコの祭》（静岡県立美術館蔵）などを出品し、会員に推挙された。昭和十八年より瀬戸に移住。メキシコの美術や絵画運動に触発された創造的で自由な精神を油彩画・版画制作や美術教育活動に示し、二科展、日本国際美術展への大作出品が毎回注目を集めた。昭和五三年、二科会会長となるが同年二科会を退会、以後、悠々自適な生活を送り、瀬戸にて、その生涯を終えている。

二 《山村初春（高草山風景）》について

本作品の裏面には、制作年やモチーフとなった場所などの記述が見られる。この記述から、本作は、静岡県焼津市と藤枝市の境にある高草山（標高・507m）をモチーフとした作品であることが分かる。「日本武尊遺跡附近」とは、実景及び地名、由来などから、現在の焼津神社の周辺を指



(左上写真) Tamiji Kitagawa
(右写真) 山村初春 静岡縣焼津高草山 日本武尊遺跡附近
(左下写真) Tamiji Kitagawa 2601 Mar 30

していると推測できる。また制作年は、「2601 Mar 30」という記述から、皇紀二六〇一（昭和十六・一九四一）年三月三〇日であることも確認できる（註一）。北川民次は、昭和十一（一九三六）年に、メキシコから帰国後、静岡県榛原郡牛尾（現・島田市牛尾）の美家や藤枝市在住の兄・小宮山勇次宅にしばらくの間滞在していたことが確認できており（註二）、本作もこの時期に制作年が近いことから、静岡での制作と考えて間違いない。

作風は、この時期の特徴である、やや長めのストロークを重ねていくハッチングとうねるような動線、豊かな色彩がみられる。同じ時期の作風として、『海への道』（三重県立美術館蔵、キャンヴァス、油彩、昭和十七年・一九四二）や当館所蔵『風景』（昭和十九年・一九四四）があり、ハッチングや色彩表現が酷似していることから、本作は、数少ない戦中期の作品と考えてよい。また静岡の風景をモチーフとした作品は、他に類例を見ないこと、これから述べ

る来歴が明確であることなど、北川民次の作品を研究するうえで、大変貴重な作品であるといえる。

三 寄贈者・北川禮太郎氏の談話

本作は、北川民次の従甥にあたる北川貫三氏の長男である北川禮太郎氏から当館に寄贈された。民次が帰国後、焼津大村新田の松永宅に寄宿していた頃、貫三氏に寄贈したものである。北川貫三氏の履歴については詳らかではないが、禮太郎氏の話によると、かつて画家を志したこともあり、染色家・芹沢謙介の学友でもある。また、民次と貫三氏は、同い年であり、同じ屋根の下で暮らしたこともあるそうである。

さらに禮太郎氏の後日談話によれば、北川民次は、静岡商業学校から早稲田大学予科に進み、同校を中退した後、進路について迷いを抱いていた。その時、兄の北川米太郎氏（静岡県議会副議長などを歴任、お茶の功労者）が、民次を連れて渡米。オレゴン州ポートランド在住の兄・津久井育平に民次を託した。その後、民次は、ニューヨークに渡り、都会の喧騒を離れるようにメキシコに渡った。略歴にある通り、民次は、メキシコでの活動を続けたが、しばらく後帰国を考えるようになる。メキシコ暮らしが長かった民次にとって、日本での生活や作画活動は、大きな不安を伴うものであったと想像できる。そこで、民次は、従甥の貫三氏を頼り、日本での作画活動の可能性を探ってもらうなかで、貫三氏は、小

説家・村松梢風に民次の作品を見せたりもした。そして、日本での生活や作画活動が滞りなく送れることが確認できた後、民次は無事帰国の途についた。本作は、そうした一連の貫三氏による民次への計らいに対する謝礼として、民次が貫三氏に寄贈したものである。

四 本作及びその収蔵の意義

北川民次の戦中期の作例は、多くはない。またこの時期には、代表作《タスコの祭》や《瀬戸十景》などが制作されており、民次の画業の中で、最も充実した時期である。メキシコでの生活や作画活動の中で、民次は、民衆壁画におおいに傾注し、またトルパムでは、児童画教育にも力を入れた。こうした中で、メキシコの民衆壁画を意識した《タスコの祭》やそれを日本の風土の中で捉えなおした《瀬戸十景》が制作された。一方で民次は、こうした作品と平行して、風景画を描いている。日本の風土や風俗を独自の視点で捉え、後に社会批判を鋭く展開する民次にとって、風景画はどのような意義があったのか。先ほども述べたように、本作は、制作年、モチーフ、来歴などが明確な数少ない作品である。戦中期の民次の風景画の意義、さらには民次の作画活動全体の意義を考えるにあたり、重要な資料、作品となり得る。

本作は、静岡の風景を描いているが、実景を忠実に描こうという思いは、さほど感じられない。どちらかといえば、メキシコ

の風景を日本で消化し深化させようとする試みがうかがえる。多くの日本人画家たちが、西欧から帰国後は、西欧伝来の油彩で日本の湿潤な風景、風土を描こうと苦心した。しかし、民次は、そのような流れに氣をとられることもなく、独自の姿勢を貫いている。民次の作風には、自らが「独創的でなければいい作品とはいえない。そして又、独創的でない作品とは、特徴のはつきり出た、個性のある作品のことである。」(註三)と語ったように、他の画家や流派から影響を受けることなく、自らの作風を確立しようとする強い姿勢が伺える。このように帰国後も、民次が一貫した姿勢を保つことができたのも、従甥の貫三氏による配慮があったからであろう。

本作を収蔵することで、北川民次の画業を改めて見つめ直し、また日本の近代洋画が抱えていた課題に対する一つの答えを見出すことができるのではないかと考えている。

註

- 一 北川民次の研究者である村田眞宏氏（豊田市美術館館長）によれば、裏面の記述のうち、木軸中央下に記された「Tanji Kitagawa 2601 Mar30」と裏面右上のラベルは、北川民次の直筆によるもので、木軸左側の「山村初春 静岡縣焼津高草山 日本武尊遺跡附近」は、民次によるものではなく、民次から作品名を聞いた従甥の貫三氏が聞き書きした可能性が高い。
- 二 「北川民次展」図録 一九九六年 愛知県美術館 一九九頁
- 三 北川民次『絵を描く子供たち』岩波書店 一九五二年 九九頁



本の窓

森村泰昌 著

『美術、応答せよ！』

筑摩書房 二〇一四年

当館の収蔵作家でもある森村泰昌氏が、「小学生から大人まで、芸術と美の問答集」というサブタイトルの通り、様々な立場の人からの美術に関する問いに回答をしています。

「美とは何か?」「作品が完成するとはどういう状態か?」という根源的な問いから「どんな蝶になりたいか?」「美大生の親としての心構えは?」といった変わった質問まで、どんな質問にも森村氏が真剣に考えています。質問者に対してわかりやすく伝えようと書かれているので、美術にまつわる疑問に思っていたことや、考えてもみなかった事柄について、一緒に考えながら読み進んでいくことができます。一冊です。

(主査 石津宏直)

変わらなきや

ふじのくに地球環境史ミュージアム 企画総務課長 青木彰彦

十三万平米。よく引用される東京ドームの敷地と比べると三倍近い。その広大な園地の中に、静岡県立美術館は建っています。昨年、開館三十周年の記念すべき節目を迎えましたが、その重厚な建物は風格を感じこそすれ、そんなに不具合があるように見えないかも知れません。それは設備の管理や清掃などの裏方さんが、日ごろのお手入れをしつかりやってくれて、ちよつとしたトラブルは、さつと正常になおしてくれる、いわばアンチエイジングの賜物でしょう。しかしながら、時の経過とともに建物や設備の老化は確実に進んでいます。そろそろ、大掛かりな若返りの術を施すべき時が至っているようです。

縁あって私が県美の施設管理担当として赴任した三年前、奇しくも「みんなのダムステルダム国立美術館へ」という、世界屈指の美術館の大改修にまつわる紆余曲折を記録した映画が上映されていました。この映画の舞台とは比ぶべくもありませんが、当時、自分の役割とをダブらせて興味深く見たことを覚えています。

結局、この春、私は、「ふじのくに地球環境史ミュージアム」という新しく開設した県立博物館に異動になり、若返りのミッションを殆ど前進させることなく去ることにな

ってしまったことは大いなる心残りです。県美で最後に携わった仕事は、開館当初から営業を続けてくれたレストラン「エスタ」の閉店と、後継のお店の開店準備でした。一抹の寂しさを感じつつ、四月にオープンしたレストラン「ロダンテラス」には、県美の新鮮力として大きな期待をしています。

昔「変わらなきや」というテレビCMがありました。県美には、その歴史と誇りを守りつつ、若返りとか、新鮮さといった、変わるこの魅力をあわせて発し続けてほしいと思います。これからも県民が誇れる「県美」で在るために。



JR草薙駅前に出張した県美ブースにて (2016年9月)

利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)
夜間開館：8月19日[土]、26日[土]10:00～19:00(展示室への入室は18:30まで)
休館日：毎週月曜日(月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館、8月14日は開館)

アクセス

- ◎JR「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡I.C.、清水I.Cから約25分
- ◎新東名高速道路 新静岡I.Cから約25分

テレフォン・サービス：054-262-3737
ウェブサイト：http://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp

無料託児サービス
毎週日曜日および祝日10:30～15:30
対象 6ヶ月～小学校就学前

※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2
総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767
学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



静岡県立美術館

Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ



2017 春 GRAND OPEN!!

Café and Restaurant
Rodin*Terrace
Shizuoka Prefectural Museum of Art

☎054-267-7888

| OPEN | 10:00～17:00 L/O16:30

| CLOSE | 毎週月曜日[美術館の休館日による]

| 席数 | 70

◎ご予約でパーティ承ります

友の会のご案内 入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。